UNIVERSITY OF YAMANASHI
はなみずき
（病院だより）
第54号
2011年1月1日
発　行
山梨大学
医学部附属病院

新年あいさつ

病院長　島田　眞路

あけましておめでとうございます。本年もよろしくお願い申し上げます。

昨年11月14日のヴァンフォーレ甲府J1昇格のニュースは、非常にうれしい出来事のひとつでした。それまでホームグラウンドを持っていなかったヴァンフォーレが、昨年3月から医学部グラウンドをホームグラウンドにして青々とした芝の上で練習を開始しました。その効果もあってJ1昇格に至ったので、私共のうれしさもひとしおです。

さて病院にとって昨年秋頃から大きな懸案事項が2つあります。

1つ目は、卒後臨床研修マッチングの問題です。今年の卒業生のマッチングは16名、27%、全国大学ワースト4位という衝撃的な内容です。その影響で、山梨県もマッチング率ワースト2位となりました。これには医学部、病院をあげて原因を究明し、対策を即座に立てなくてはなりません。早速対策委員会を立ち上げ、研修プログラムの見直し、研修センターの改修、研修医給与の大幅引き上げなど、対策案を検討しています。ご意見等あれば、ぜひ病院長までお寄せ下さい。

2つ目は、病院再整備に向けての準備です。今年はいよいよスタートの年です。昨年には合格することが非常に難しいとされる、日本医療評価機構Ver.6を受審し、みごと一回で合格しましたが、その際、主に指摘されたことは、27年経過した病院建物、病室、風呂、トイレなどハードの老朽化です。新病棟ではこれを一新して、ハード･ソフトとも充実した日本一の病院を目指したいと思います。

皆様の積極的なご意見ご協力をお願い申し上げます。

後発医薬品の導入について

副薬剤部長　鈴木　正彦

当院の平成20年度後発医薬品購入率は2.1%であり、国公私立大学病院(特定機能病院）82病院（平均5.6%）中75番目と大変低い位置にありました。また、県内では県立中央病院など多くの公立病院で後発医薬品の導入が進んでおります。

このような状況から当院でも後発医薬品の導入が病院運営委員会で決定され、5月に病院長より薬事委員会に購入率5%程度を目標とした切換え医薬品の選定について諮問がなされました。切換え医薬品の具体的選定に先立って、品目の増大による現場での混乱を極力抑えるため、購入金額の多い薬品から後発医薬品に切換えること、先発医薬品企業と同程度の情報提供能力を有する企業の後発品に変更すること、という方針が病院運営委員会にて了承されました。薬事委員会では、診療科への意見調査、3回の薬事委員会審議を経て10月に第一次答申を行い、運営委員会にて17品目28規格の後発医薬品への切換えが承認されました。（医薬品情報2010-15参照）

今回の切換えにより大学病院平均値に近い5%程度となると推計されます。後発医薬品は昨年12月1日より購入を開始しましたが、薬剤部薬品在庫の関係でオーダ開始日は個々の薬品で異なります。入力方法などDI-BOXにてご確認下さい。

末筆となりましたが、診療科におかれましてはご多忙中のところ、調査ならびに意見調整にご協力いただき、また、様々な診療上の不安や不都合を感じられている中でご了承いただきましたこと御礼申し上げます。

病院再整備準備室の立ち上げ

副病院長　藤井　秀樹

あけましておめでとうございます。この新しい年にいよいよ病院の再整備の準備が始まります。医学部附属病院は昭和58年10月に開院され、幾多の変遷を経て30年近くが経過しました。その間、変化する医療に対応し既存の施設に各種診療機能を増設したために、非常に狭隘な施設となり、日々進歩する医療に対応できなくなっています。全職員がその再整備を強く望んできました。

このようなことを背景に、島田病院長を中心に「病院再整備準備室」が立ち上げられ、既に事務部門が文部科学省と活発に交渉を進めています。また新病院のあり方をハード、ソフト両面で早急に決定せねばなりません。附属病院は県内医療の中心であることは当然ですが、医学部学生の実習施設であり、先進医療を生み出してゆく施設でもあり、この3つの使命を担う病院は附属病院以外にはないことを強く認識する必要があります。

また、今回の再整備後は長い期間に亘って大きな整備はなされないと思います。したがって、これからの20年間くらいを見込んで、この間に、社会のニーズがどう変化してゆくのか、それ以上に医療がどのように変化してゆくのかを的格に判断し、それを現在の再整備に反映するという大局的な視野を持って進めることが重要です。これから「病院再整備準備室」に種々のワーキンググループが付置され、病院の再整備が実態として描かれてゆくと思われますが、ワーキンググループの方々には是非この大局的な視野を忘れないで頂きたいと思います。病院再整備の予算は、本年提出する平成24年度の概算要求に乗せる必要があり、現時点でも時間に余裕はあまりありませんが、今こそ病院のみならず全学全職員が一丸となって取り組もうではありませんか。

病院再整備準備室専門員就任あいさつ

病院再整備準備室 専門員　名取　一也

昨年10月1日付けで病院経営企画室専門員を拝命しました名取一也です。病院再整備計画の担当ということで、その責務の重大さに身の引き締まる思いをしております。

私は、昭和57年4月に山梨医科大学に転任以来、附属病院開院から山梨大学の統合までの約22年間お世話になり、医事課、経営企画課、企画・評価課を経て、この度就任いたしました。

本院は、昭和58年10月の開院で、当初322床として診療業務を開始しました。病院の正面玄関は、現在スロープとなっていますが、元々段差があり、スリッパに履き替えて院内に入るという想定で設計されております。そんな建物ですから、病棟、中央診療棟、外来診療棟など、どの部署においても狭隘さが激しく、運用で何とかやりくりしているという状況にあります。

今後、高度で安全な医療の提供、高度医療人の育成、先進医療の研究と開発の推進、地域医療ニーズへの対応、労務環境の改善など、大学病院としての機能を果たすために、病院の再整備は急務となっています。

まだまだ未熟者ではございますが、病院再整備計画の達成および本院の発展のために全力を挙げて職務に取り組む決意です。

しかし、病院の再整備には、全診療科の先生方をはじめ、コ・メディカルや事務担当の皆様のご協力ご支援が必要であります。院内の皆様におかれましては、今後、より一層のご指導ご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

「新相談室」の運用開始について

医療福祉支援センター 専任師長　有田　明美

「この病院での治療は終了したと主治医から説明があったけれどこの先はどうしたらいいのか…」70歳後半の患者さんの妻と娘さんが相談に見えました。「緩和ケア専門の病院にも相談に行ったけれどあんなに高額な入院費は用意できないし、適応ではないと言われてしまいました」と泣くに泣けないといった状況で切迫した様子でした。このような相談に見えた患者さんのためには、プライバシーの保てる個室は必要不可欠です。この度、患者さんにとって安心できる環境で相談を受けることができるようになりました。プライバシーの保てる「新相談室」で涙ぐむこともあるかと思い「テッシュの箱」は常に用意しています。

最近では、二人に一人は“がん”になり三人に一人は“がん”で死ぬというデータがあります。少子超高齢社会に拍車がかかりこのように「がん難民」といわれる患者さんは増加することは予測され、危惧されているところです。

医療機関の役割分担は、その病院の性格上、当然の事として課せられています。急性期病院である本院での治療の区切りをつけた患者さん･家族が、この先どのような場所で療養を続けたらいいのか、関係部署の皆様と協力しながら支援できたらと切に思っています。

ご利用の際は、原則として予約制にしていますので、事前に電話連絡をお願いいたします。

医療福祉支援センター 内線 2466 2467

看護師	有田	PHS 6588
	小池	PHS 4756
	竹内	PHS 6372

医療法の規定に基づく立入検査について

総務課 総務・研究協力グループ係長　植村　健

例年行われている医療法の規定に基づく立入検査が、本年度も去る10月29日、山梨県から11人、関東信越厚生局から5人、計16人の検査官が来院され、管理棟3階大会議室において実施されました。

当日は、医療安全、院内感染対策、管理関係、個人情報保護、看護、放射線、薬剤、給食関係など多岐にわたる検査及び現場視察が行われ、本院からは島田病院長を筆頭に、各部門長等が対応に当たりました。数多い検査項目の中でも医療安全、院内感染対策に関して多くの時間を費やし、検査官からの指導のほか、本院の医療安全、院内感染対策状況を中心に活発な意見交換が行われ、双方「安全」「感染対策」への意識の高さが感じられました。

検査終了後は、「適正な管理がなされており概ね良好という結論であり、聞き取り調査の中で話した個別事項については、できることはすぐに進めるなど、今後も引き続き医療安全、院内感染を中心とした医療の適正な運営のために尽力して欲しい」との講評をいただいております。各部門においては、個別に指導を受けた事項に関しては、委員会等で協議するなど、積極的な取り組みをお願い致します。また、これからも円滑な改善を進めるため、部門間の壁を取り払い、お互いの立場や役割を尊重し、より良い協力体制の構築を推進し、「病院全体がひとつのチーム」として、「一人ひとりが満足できる病院」にしていきましょう。

最後になりますが、本紙面をお借りして、当日の対応、記録者の方々をはじめ、事前調書の作成、検査書類の準備など検査にご協力いただいた関係者全ての皆様にお礼を申し上げます。「ありがとうございました。」

看護師による静脈注射の開始

副看護部長　岩下　直美

7月に看護師による静脈注射実施に向けた研修会を実施し、8月はヘパリンロックと翼状針、9月は静脈留置針の集中訓練を実施しました。2カ月で医師84名、看護師110名の指導者の協力を得て、レベル2（ヘパリンロックと翼状針）は188名、レベル3（静脈留置針）は78名の合格者を出すことができました。

各セクションでは、看護師による静脈注射の実施範囲について各診療科と検討を重ね、まず看護師が安全に実施できる部分から開始することにしています。例えば、ヘパリンロックの実施、オンコールの手術、検査患者への留置針の実施などです。初回は安心して静脈注射ができるように医師と一緒に実施する、また、2回失敗したら医師に交代する、など各セクションで静脈注射に取り組む環境を整えています。現状を調査するために、11月29日～12月12日の2週間、実践状況の調査を行いました。

セクションにより進行状況は様々ですが、皆さまのご協力を頂きながら、実施範囲の拡大に努力していますので、今後ともご支援よろしくお願いします。

実施前の講義

訓練用模擬腕

模擬腕での訓練

「患者と共に行う安全活動」

安全管理室 GRM　古屋　塩美

「安全な医療を提供するために、もっと患者さんに参加してもらおう」という思いで、今年度の重点目標に「患者さんと共に行う安全活動」を挙げ活動しています。

患者さんと共に行う安全活動の中の、「患者参加によるフルネームの確認」は、医療を提供すべき患者さんを間違えないために、医療者が十分な確認を行うということです。そして、医療を受ける患者さん自身が、安心して医療を受けられるようにするために、患者さん自身にも確認してもらうことが必要なことだと考えています。

「患者さんと共に行う環境調整」について、ベッド周囲は医療者からみると患者さんに医療を提供する場所であり、より安全性を考慮したものでなければならないものです。しかし、患者さんにとっては生活環境であり、過ごしやすさが重要な点になってきます。安全＝過ごしやすさではない場合もあり、その場合に患者さんと共に、より安全で、なおかつ患者さんにとっては過ごしやすい環境を一緒に考える必要があります。

今年度の医療安全協議会の中でも、「患者中心の医療」から「患者の健康問題中心の医療」を考えることが必要と話されていました。言い換えれば、患者さん自身が医療チームの1人として参加し、自分自身に提供される医療を一緒に考えられるようなチーム作りをしていくことが必要ということです。

医療者及び患者さんは、それぞれの立場で、気づいたことを共有し医療に参加することが、チームで医療安全に取り組むことになるのだと思います。これからも、患者さんをも含め「病院全体がひとつのチーム」として医療安全に取り組むために、協力をよろしくお願いします。

「平成 21 年度決算の附属病院セグメント情報について」

財務管理部 財務管理課 予算・決算グループリーダー　雨宮　隆

国立大学法人は、平成16年度から各法人毎に財務諸表を作成し、個々の財政状態や運営状況を把握･公表することになっています。公表データは本学 HP･財務に関する情報（http://www.yamanashi.ac.jp/modules/profile_top/）にも掲載されており、このうち平成21年度の「附属病院セグメント情報」は下記の表のとおりです。

平成21年度は、収益（収入）面でみますと、入院患者数は前年度（20年度）に比べて、2.1%減ったものの、外来患者数は1.5%増加し、併せて、手術件数の増や7:1看護加算の新規取得など、病院スタッフ皆様のご努力により、附属病院収益は対前年度比で約5億4千1百万円、4.4%も増加しました。この場をお借りして、ご協力に対し、感謝申し上げます。次に費用（支出）面でみますと、業務費用が20年度に比較して、約8億9千3百万円伸びておりますが､内訳として、物件費で病院収益（請求額）の増加に伴う薬品等、診療材料費の増加や、診療用諸機械類の購入による設備費用の増加に伴い、約7億4千5百万円の増となっており、また、人件費で7:1看護加算取得のための看護師数の増加などから、約1億5千5百万円が増となっています。

診療報酬請求に伴う附属病院収益が寄付金や受託研究等収益など、附属病院のその他の収益に比較し、突出しており（約129億2千5百万円で附属病院全収益（約155億2千1百万円）の約83.3%）附属病院収益が今後も病院経営を大きく左右する要因となっています。

また、業務損益が約6億8千2百万円と利益計上になっておりますが、これは国立大学法人会計基準のルールによるものが大部分で現金の裏付けのない利益です。21年度の附属病院財務状況は以上のようになりますが、今後も引き続き、病院の安定経営が図れるように、皆様のご協力をお願い申し上げます。

患者数比較　（単位：人）

区　分	平成 20 年度	平成 21 年度	増減率
入院（1日当）	187,853 (515) (85.8%)	183,838 (504) (83.9%)	△ 2.1%
外来（1日当）	293,766 (1,209)	298,048 (1,232)	1.5%

附属病院セグメント情報　（単位：千円）

区　　分	平成 20 年度	平成 21 年度	増△減額	増減率
業務費用	13,945,135	14,838,527	893,392	6.4%
業務費	13,649,248	14,513,134	863,886	6.3%
教育経費	3,521	2,423	△ 1,098	△ 31.2%
研究経費	67,802	50,154	△ 17,648	△ 26.0%
診療経費	7,545,422	8,289,931	744,509	9.9%
受託研究費	77,184	62,307	△ 14,877	△ 19.3%
受託事業費	10,209	7,714	△ 2,495	△ 24.4%
人件費	5,945,110	6,100,605	155,495	2.6%
一般管理費	79,593	89,732	10,139	12.7%
財務費用	216,294	235,661	19,367	9.0%
業務収益	15,053,065	15,520,910	467,845	3.1%
運営費交付金収益	2,389,694	2,297,630	△ 92,064	△ 3.9%
附属病院収益	12,384,059	12,925,315	541,256	4.4%
受託研究等収益	90,000	71,686	△ 18,314	△ 20.3%
受託事業等収益	10,593	7,999	△ 2,594	△ 24.5%
寄附金収益	21,515	8,593	△ 12,922	△ 60.1%
補助金等収益	44,646	109,216	64,570	144.6%
資産見返負債戻入	92,257	65,036	△ 27,221	△ 29.5%
雑益	20,301	35,435	15,134	74.5%
業務損益	1,107,930	682,383	△ 425,547	△ 38.4%

早期臨床体験実習（ＥＣＥ）を終えて

山梨大学医学部医学科１年　神部　茉由

立ちっぱなし･歩きっぱなしの看護師の勤務が予想していたよりも遥かに大変であったことに驚いたのと同時に自分が恥ずかしくなりました。何故なら、自分はどこかで「医者は看護師より立場が上だ」と少しでも考えてしまっていたことに気づかされたからです。看護師は医者ほどの医療行為は出来ない。だから、別にそこまで大切なのか、何故自分たちは医者になるのに看護師についていかなくてはならないのか、というある種の不満というものを持っていたと思います。実習が終わった今、そう思っていた自分をひどく浅はかであったと感じます。看護師の存在なしには、医者は患者の状況を知ることはできません。どんなに医者が治療に尽くしても、患者さんに（特に入院されている場合）一番接するのは看護師なのです。その看護師が身の回りの世話をしたり、不安を聞いたり、ときには世間話をしている様子を見て、私はこの世界にいる「看護師」という存在の大切さにやっと気付いた気がします。

また、手術室や内視鏡からベッド洗浄室まで、病院内の色々な場所を見て医療の現場の流れや体制を肌で感じることができたこと、そしてそれを1年の今感じられたことはとても意味のあることであったと思います。

これからの進路に大きく関わる実りある実習を提供してくださった病院に感謝しています。ありがとうございました。

クリスマスコンサートの開催

総務課 総務・研究協力グループ　小林　広美

12月16日午後6時より附属病院外来ホールにて恒例のクリスマスコンサートが開催されました。当日は入院患者さんとそのご家族、教職員の数多くの皆さんにご来場いただき、1時間あまりのコンサートとなりました。今回は、昨年J1昇格を決めたヴァンフォーレ甲府のマスコットキャラクター“ヴァン君”が登場し、例年以上に会場も盛り上がりました。

甲府室内合奏団の方々

武田副病院長の開会の挨拶に続き、甲府室内合奏団によるバイオリン、フルート、ピアノの軽快かつ優美な演奏に、贅沢な気分を味わうことができました。続いて、昨年は出演できなかった4階西病棟ハンドベル部も、七夕コンサートと同様に、見事なチームワークを披露していただきました。最後に医学部交響楽団の迫力あるオーケストラの演奏でコンサートは無事終演を迎えました。

短い時間ではありますが、院内でクリスマス気分を味わい、楽しいひと時を過ごせたのではないかと思います。

演奏するヴァン君!

七夕コンサート、納涼花火大会に続き、この度のクリスマスコンサートと、今年度の患者さん方への慰安事業を滞りなく実施することができました。ご参加、ご協力いただきました皆さんに感謝申し上げます。

次回も“ヴァン君”に出演をお願いしたいと思います。

4階西病棟ハンドベル部の皆さん

「元気な挨拶」

医事課 警備担当　渡辺　光長

山梨大学附属病院に勤務して、早くも２年が過ぎようとしています。以前勤務していた仕事場とはかなり違い、戸惑いも有りましたが、医療に携わっている職員の姿を見て、自身の仕事に対する考えを全て改め、一から根本的に変えなければ対人関係はつかめないと思い、その第一歩が題名にあります「元気な挨拶」です。

一昨年の秋頃より、多数の患者さんから優しい言葉をかけていただき、本当にこの仕事に就いて良かったと心より思っております。

患者さんからは、再来受付機のところに居る、良く動く太ったおじさん、目つきは悪いがいいおじさん等、色々な呼び方をされますが、うれしいことです。

これからも、患者さんを第一に考え、私の道標であります、『日々反省、日々前進、明日に生かす』と、今年の目標であります『安心できる病院』を念頭に置き、これからも「元気な挨拶」で頑張ってまいります。

小児科病棟はみんなのミュージアム

小児科准教授　犬飼　岳史

小児科病棟のプレイルームには、2004年7月から中央市生涯学習館の分館として「ミニ子ども図書館」が開設されています。2009年に伊藤忠記念財団の「子ども文庫助成事業」の「病院施設子ども読書支援」プログラムに採択されて、新たに書架を購入することができました。

2008年から「小児科病棟はみんなのミュージアム」と題して花王コミュニティミュージアム・プログラムの助成を受けています。今年度は７月15日に院内学級で「なにわホネホネ団」の西澤真樹子さんによる特別授業が行われました。子ども達は、西澤さんが持って来て下さった動物のホネを手に乗せてみたりしながら、もとの動物が何なのか一生懸命に考えて、ホネで動物の暮らしを勉強しました。

西澤真樹子さん

８月18日には外来ホールで直径４ｍのエアドームを使った本格的なプラネタリウム投影が行われました。これは、夏休みに入院している子ども達が家族で楽しめるように平日の18時半から行ったものです。約10家族を含む子ども達が、一緒に開催された「つみ木広場」も楽しみました。

直径4mのエアドーム

10月22日には兵庫県立人と自然の博物館の三橋弘宗さんによる特別授業「森から川への贈り物」が行われました。三橋さんは樹脂の中に昆虫や魚類を封じ込めた130点あまりの封入標本を持って来て下さり、川から海までの生き物が森によって育まれていることを、標本を見ながら勉強しました。

また、小児科病棟内の展示スポットでは松村誠さんのアフリカの動物達の写真展示が、プレイルームの展示スポットでは牛山俊男さんのネパールの子ども達の写真展示が行われています。

三橋弘宗さん

消防訓練の実施

管理課 総務・予算・資産グループ　嶋　幸司

医学部附属病院では、10月25日午後1時30分から、6階東病棟で火災が発生したことを想定した消防訓練を甲府南消防署の協力の下に実施しました。

訓練では、平成21年度の消防法改正で設置が義務付けられた自衛消防組織の統括管理者が、初期消火･避難誘導･救護･工作･警備等の各班長の指揮を執り、最終的に災害対策本部長である病院長に避難完了の報告を行いました。

出火想定場所の6階東病棟では、屋内消火栓を使用した放水訓練に加え、避難経路の防火扉の作動による、より現実的な避難誘導訓練を実施することができました。また、4階西病棟では、垂直式救助袋を使用して地上に降りる避難訓練、2階西病棟では、避難用スベリ台による避難訓練を行いました。訓練に参加した教職員は、被害を最小限に留めるための行動を習得するため、緊張感を持って機敏に行動しました。

また、閉会式後には消火器による初期消火訓練、体育館脇及び病棟3箇所（6階･4階･2階）の消火栓を使用した放水訓練も実施しました。

複数の病棟から放水するのは初めての試みでしたが、過去の訓練より多数の職員が放水を体験することにより、防火･防災に対する意識の高揚を図りました。

病棟からの放水訓練

山梨大学再発見

クリスタル科学研究センター

クリスタル科学研究センター長　中川　清和

クリスタル科学研究センターの前身は、1962年に天然の鉱物、宝石を人工合成する研究施設として人工鉱物研究部門のみの1部門からなる工学部附属の研究施設（無機合成研究施設）として創設され、当時、人工水晶の育成に関する研究等で科学技術庁長官賞をはじめとする各種の賞を受賞しています。その後、1964年に合成研究部門、1973年に表面物性研究部門の3部門となり、わが国の貴石研磨、加工および水晶振動子の生産中心地である山梨県に設けられたユニークな研究施設として、地元業界との密接な交流を基に発展に貢献してきました。さらに、世界初の大型で高純度の酸化物超伝導体単結晶の育成に成功を受けて1992年に超伝導材料合成研究部門を新たに設置し、新機能を有する無機結晶材料（人工水晶等）の開発研究を行ってまいりました。

先導的研究へチャレンジ 、異分野の機関や企業との共同研究や交流 近年の社会や学問の激しい変化に応じるために、外部評価の後に2002年4月には細分化された部門を統廃合し、結晶ボンドエンジニアリング研究部門、結晶構造エンジニアリング研究部門の2大部門からなるクリスタル科学研究センターに改組し現在に至っています。

現在進行中の研究テーマとしては、光活性電子デバイスを目指した酸化物単結晶の育成、鉛フリー圧電体などの酸化物の合成、超高移動度デバイス開発用半導体積層構造の形成、等の新規結晶の育成･評価が挙げられます。

クリスタル科学研究センター外観

半導体積層構造の微細加工（左）
酸化物単結晶の育成（上）

PRINTED WITH SOY INK　VOC FREE
この印刷物は環境にやさしいVOC（揮発性有機化合物）成分フリーの大豆油を主体とした植物油型インキを使用して印刷しました。